

## 翻刻『兵庫築島伝』その二

森 田 雅 也  
高 瀬 万 人

本稿は、関西学院大学図書館蔵『兵庫築島伝』巻二の翻刻である。書誌及び凡例は先号（『日本文藝研究』第五十七巻第二号）と同様であるが、利用の便を考慮し、凡例のみ再掲する。

### 【凡例】

- (1) 漢字の旧字体は、適宜現行の字体に改めた。
- (2) 漢文の返り点、白丸「」は原文に従い、連字符については省略した。
- (3) 翻刻本文中の片仮名、平仮名は、原文の表記に従った。
- (4) 合字はすべて現在通行の文字に改めた。
- (5) 丁の変わり目を、丁数をアラビア数字にて、表裏は片仮名語頭の一字にて（1オ）ように示した。
- (6) 挿絵は、底本を撮影し、挿入した。
- (7) 明らかに誤字・誤刻と思われる箇所については、下に（ママ）と付記した。
- (8) 漢字に濁点が付されている場合には、振り仮名の形で（ ）と示した。
- (9) 仮名として読める漢字も原文のままとし、振り仮名の形で（ ）で括って仮名を振った。但し、振り仮名において用いられている場合は、その限り

ではない。

(目ウ)

(10) 振り仮名や仮名遣い、反復記号(「、」「く」)など、仮名の清濁は、底本のままとした。

(11) 序文にある印字も現行の字体に改め、翻刻した。

兵庫築島伝巻二

吞一 叟 积円 信著

【翻刻】

兵庫築島伝巻二

目録

三 松国春事蹟并近藤重友恋明月

野瀬蔵人奪明月并国春令室逝去

近藤重友発心并八郎重清克家名

国春発心登高野并横笛慕夫到嵯峨

滝口時頼遁世并横笛執念為黄鶯

已上

(目オ)

三 松国春事蹟并近藤重友恋明月

○爰ニ津ノ国難波ノ入江ニ。三 松刑部左エ門国春ト云人アリ。文武ノ兩道ニ達シ。威名近邑ニ振フ殊ニ富有ニシテ。陶朱モ耻ヘキニアラズ。時ノ人コレヲ三 松長者ト称シ。ウラヤミ且ツ貴フ惜ムラクハ。国春家ヲ嗣ヘキ子ナカリケレバ。夫婦共ニコレヲ歎キテ鞍馬ノ多門天ニ参籠シ一心ニ祈願ヲコメ。一子誕生ノ事ヲ祈ラレケル。頃ハ十月ノ末。旬風モ烈ク空カキ曇リ。霞ウチ散テ最モ寒カリケレドモ。其厭モナク日日ニ参詣シテ。専念不乱ニ祈誓アル。ステニ二七日ニ及ビケル夜半バカリニ。夫婦諸

(一オ)

空白

共別館ニテ。トロノト打盹ケル夢ノ内ニ。忽然トシテ一人ノ美婦人艶容麗顔比ナキ御姿。コレソ吉祥天女ト拝レ玉フガ。夫婦ノ傍ニ近ツキ玉ヒ。サモ御喜バシキ顔容ニテ莞尔トシテ。打笑玉フトミテ夢サメヌ。コレヨリ国春ノ令室懐胎シケルゾ不思議ナレ。斯テ金鳥早く去リ翌年ニ及ヒテ国春ハ三十二歳令室ハ二十八歳ナリ。仲秋十五日ノ夜。皎々トシテクマナキ月ノ小夜中ニ姫ヲ産ス。夫婦カキリナク喜ヒテ。スナハチ其名ヲ明月ト名ク。美麗ナルコト双ヒナク玉ヲ掌中ニ弄スル如ニシテ。夫婦ノ寵顧イワン方ナシ。巨多ノ侍女ヲ添ヘ乳母ニハ家臣林六郎春信ノ妻。小車トイヘルカ参リケル。生長ニ随ヒテ。器量甚タスケレ。西施ガ媚飛燕ガ愛。タトヘン方ナク。窈窕タリ。ソノウヘ

(1ウ)

万ノ芸ニカシコク。才発最モスグレケリ。故ニ見人聞者肝魂ヲ傷スト云事ナシ。爰ニ津ノ国渡辺近キ神崎ニ近藤七郎重友ト云者アリ。父ハ葛葉庄司長清トテ。武勇

抜群ノ豪英ナリ。重友ハ其嫡宗ニシテ父ニ劣ラヌ勇士ニテ。殊ニ文道ニ達シ器量ノ若者ナリ。生質容麗ニシテ風流ノ男ナリジカ。明月姫ノ美麗ナルヲ見テ。心怱然トシテ神魂形ヲ離ル、ガ如ク類ニ恋慕ノ情キザシ相立ルカゴトク思ハレケレバ伝ヲ求メテ歌ヲ詠文ヲ尺サレケレドモ。中ノ手ニダニ取上ズ。重友イヨノ心ヲ傷胸ノ中ノ思ヒハ富士ノ烟ニアラハレ。袖ノ上ノ涙ハ清見ガ関ノ浪ニモ異ナラズ。今ヲ限ノ玉章ヲ書テ贈ラント思フ折カラ明月姫。住吉明神へ参詣ノ由キコヘケレハ。重友コレ幸ナリト思ヒテ。

(2オ)

明月ノ跡ヲ尋子至リケルニ。姫ニハ從臣多クツキソヒ。侍女ヤ婢アマタ從ヒアリケレハ。重友モ詮方ナク又空ク帰ランコトノ本意ナサニ一通ノ文ヲ認メテ傍ヲツト通ル様ニテ明月姫ノ乘玉ヘル摺輿ノ中ヘ玉章ヲ投入テ。急キ館ニ帰ケル。姫ハ顔打赤メテコレヲ隠。明神へ参詣シテ帰ルサ。先ノ文ヲ取出。摺輿ノ内ニテ窃ニ此文ヲ披キ見

レハ綺爐ノ煙ノ匂フカキニ筆ノ立トモ尋常ナラズ。思モヨラヌ花ヲ見テ露ト消ナン悲シサヨ。コレマテ文ノ数カサナリツレトモ。伝ノ情ヲタニモカケラレス心強御事ト恨ノ涙ニ袖モシホレテ。干敢ス迫モ此世ニテハ叶フヘキ事ナラ子ハ。生テ兔ニ角思ハンヨリ。夕、死ントノミ思ヒキワメヌ。若此風ノ便ヲハ。不便ト思召御返辞モセマシフ

(2ウ)

思召ナハ。神崎ニキコヘタル。釈迦堂ノ鐘ノ緒ニ結ビ。夕ヘト書トメテ。奥ニ一首ノ歌アリ

知ラセテモ。印ナクテハ杉ノ門。アケヌクレスト。イカテ待ミント

認メタリ。明月姫コレヲミテ。サスガ情ニヨワル心ニヤ。両眼ニ涙ヲウカヘ。思ヒ入タル風情ニテ在ケレトモ。父母ノ心恐ロシク深藏メテ置タリケリ。嗚呼人世ノ万事皆共ニ切ナリト雖トモ就レ中貴賤ノ隔ナク心ヲ迷ハシムルハ。此道ナリ故ニ中華ノ聖人モ。少之時。血氣

未定戒之在色ト云フ。在色ト云フ。色ト云フ。宣ヒキ。国ヲ傾城ヲ傾ケシ漢武ノ昔モ。雲トナリ雨トナルト焦レ玉ヘル楚襄ノ古モ。千秋万古北邙ノ塵トナリヌルヲヤ。重友カ恋慕ノ迷ヒモ。後ニハ発心ノ因トナリヌルソ。有難キ

(3オ)

野瀬蔵人奪二月并国春令室損簪粧

○春花開テ黄鸝飛ヒ協風起テ弱柳吹カル。青山ノ色。

霏々トシテ春草ノモヘ出ル野辺ニハ衆木楨幹ヲイサギヨクス。遅日園林ニ興ヲ促ガシ短宵睡房ニ曉ヲ恨ム。情トクサガト共ニ屯生ス。詩ニ有レ女懷春吉士誘レ之トカヤ。明月姫ハ乳母ノ小車ヲ唯一人召連玉ヒテ。近隣ノ野辺ニ出。千草ノ色ヲナカメ。若菜ヲ摘根芹ヲ取り手戯シテ遊ヒケル。爰ニ丹波ノ国野瀬ト云処ハ。御室ノ御領ナリ。其代官ヲハ。仁和寺蔵人兼氏ト申者勤ケリ。兼氏ニ一子アリ野瀬蔵人家兼ト号ス。万事ニ器用ニシテ。多芸多能ナリ殊ニ和歌ノ道ニカシコクテ。古今美麗ノ艶男ナリシガ。河内ノ国禁野ト云ハ。我所領ナルニ

困テ。点檢ニ来リ

(3ウ)

十日アマリ逗留シ。諸処ノ旧地古跡ヲ尋子。歌ヨミ詩  
ツクリナドシテ慰ミ。今ハ古郷ヘ帰ラントテ。郎等從臣  
アマタ引具シ撰津ノ国ニ立コヘテ。我羈旅ノ別荘。柏原  
ト云ニ茅宅ノアリケレハ。コレニ立ヨリ二日ハカリ逗留  
アル。此茅宅今ニ其跡アリ河ツレノアマリニ。家臣蜺名五  
郎氏貞。長尾新十郎兼時ヲ召連。從僕ヲ隨ヘテ。鶉狩セ  
ントテ。近辺ヲ徘徊シ。日暮ニ及マデ遊ヒ歩キケル。  
既ニ日モ西山ニ傾ントセシカハ。イザ帰館スヘシト  
テ。皆々打ツレ立歸ル其歸路三松刑部左エ門ノ娘。  
明月姫モ。同ク家ニ帰ラントテ摘トリツル。若草ヲ小車  
ニ携ヘサセ勃率トシテアユミユク。藏人家兼コレヲミ  
テ。何トナク姫ノ姿ニ迷ヒ從臣ヲ処々ニ忍ハセ。一群薄  
ノ陰ニカクレ。明月姫ヲ窺ヒ見ル

(4オ)

姫ハ我家ニカヘラントテ。金剛草ノ一英萌出タルヲ取テ  
斯ゾ

春ハマツ。駒ツナキニゾ。若葉サス。古葉ノ色モミヘ  
ワカバコソト

詠シテ打笑タリケル折柄薄ノ陰ヨリ

春ノ日ニ。主モミヘサル離レ駒。雲ノ井ニテモ繫トメ

バヤト

ヨミテ藏人家兼。ツト頭レ出タリケル。明月姫ハ耻シサ

ニ驚キテ足早ニユカントセシヲ引トメテ。家兼サマノ

口説テ蜺名五郎ニサ、ヤキシカバ。畏リ奉ルト摺輿ヲ搔

ヨセテ。明月姫ヲ抱ノセ乳母ノ小車モ兜轡ニノセ。家僕

早クノ下知ヲナシ。藏人ハ摺輿ニ引傍其夜ノ内ニ支

度シテ丹波ノ国ヘト連販ル。乳母ノ小車モ是非ナクノ

ニ。随ヒ往ク急グ程ニ野瀬ノ庄ニ着ケレハ家兼館ヘツレ

カヘリ。別ニ曲房ヲ新造リ美

(4ウ)

々敷カマヘテ。明月姫ヲコ、ニ入レ。乳母小車付キ添ヒ

テ。外ニ侍女コシモト鬢シク数多アマタツケ。慇懃チシゴロニイタワリケル。コレヨリ家兼タガイ明月イコ互ロサシノ志サ浅カラス。深キ中トソナラレケル。サレトモ明月。小車ハ。古郷ノコトヲ案ナヤジ悩ミ何トゾ此由知ラセ參ラセ父母ノ御心ヲ安メ度ト。便リセンニモ家兼堅ク制シテ今暫ク便リスヘカラスト留メケルユヘ。乳母メノトモ姫モ詮方ナク。父母恋シナツカシヤト。望郷バウケイ親シシムノ涙ナミダセキアヘズ。家兼イロノナグサメスカシケル程ニ。既ニ春スキ夏来リ。偏ニ思フ夏衣夫婦ノ中モ睦ムツマジク裏ウラナクゾミヘニケリ去程ニ難波ノ三松国春ノ館ニハ日暮ニ迫リヌレドモ明月モ乳母モ帰ラサレハ。心ナラス思ヒテ。従僕シシボクヲツカワシテ近辺ノ野ヲ尋子ヒト。捜セドモ在ザリケレハ。大ヒニ

(5オ)

驚サウドロキ。搶擲シテ大勢ヲ以テ手分シテ。尋ヌレドモ行衛シレス。国春夫婦ハ気モ心モ顛倒散乱シテ。侍女共ヲ召テ汝等モシ心ロアタリノ事ハシアラバ。包マズ申スヘシトアリケレハ。皆々申シケルハ我々御傍ワノバニ付添ツヒミヒラセ

諸事ヲヨク存シ候ヘドモ。サシテ心アタリノ事モ候ハス。過ニシ住吉詣マフデノ時神崎ノ近藤七郎殿。姫君ヲ兼テ恋玉フシノリモヒシガ姫君ノ御摺輿ノ内ニ玉章ヲ投入レ玉ヒヌ。ソレヨリ前ニモ度々文ヲ贈リ歌ヲヨミ心ヲ尽サレテ候ヒシガ。必定コレハ近藤殿ノ奪ムスビヒ取レシニ違ヒアルマシト口々ニ申ケル。国春聞テ愾ササコソト思ヒ。間者ヲ以テ近藤ノ方ヲ伺ハシムルニ更ニ其躰テイモナク重友ハ此頃病床ニ臥シテ出勤モナク。閑処ニ引籠リ専薬餌ノ設ノミナリトコソ。告ケタリ

(5ウ)

ケル国春モ今ハ力ヲ落シ。猶モ諸方へ人ヲ入レ吟味スレドモ相シレス剩アマツサヘツキ添シ。乳母ノ小車モ帰リ来ラサレハ。雲クモニシルシヲ付ルカ如ク茫洋トシテ。左右ノ手ヲ失フカコトシ殊コトニ痛キハ国春ノ令室ナリ愁歎カキリナク。月ヨ花ヨト寵愛セシ懸替カケカヒモナキ一人娘ノ事ナレハ。狂氣ノ如クナゲキ悲ミ終ニ病ノ床ニゾ臥玉イタヒフ国春猶モ心ヲ傷メラレ医術手ヲ尽ル、トイヘドモ更ニ其験ケンナク

テ。四月十五日ト云ニ終ニ空クナリ玉フ国春ハ歎ノ上ニ  
又歎ヲ重子誠ニ羽翼ヲ拔レシ心地シテ悲ミケレドモ。サ  
テシモアルヘキコトナラ子ハ。妻ノ死骸ヲ葬リテ墓ヲ築  
キ吊ヒケル

国春令室ノ墓墳。元トマコハ神崎ニ在ケルヲ中頃河辺  
郡尼

(6オ)

崎如来院ノ内ニ引テコレヲ立ツ国春ノ墓モ当寺ヨリ  
立レ之。今現ニ在ト云云

近藤重友発心并八郎重清克一家名一

○近藤七郎重友ハ。明月姫ノ行衛シレザル由ヲ聞テ大ニ  
驚キ力ヲ落シ。此頃病ニテ引コモリアルモ。実ハ明月姫  
ヲ恋テノ病困ナリ。過シ住吉參詣ノ時ニ。投入タリシ玉  
章ノ返モアルヤト明暮ニソレヲ楽トシテ待居ケルニ。斯  
ル風聞ノアリケレハ。イヨイヨ心ヲ苦メテ愁歎カキリナ  
ク。アワレ狐狸ノ為ニ取ラレシヤ何者カ奪ヒケルゾ。是  
非モナキ身ノ上カナト兎ヤ角ト案シ惱ミ愁涙ニ沈ミケル

ガ頓テ心ヲ取直シイヤ〜武士ニ似合ザル未練ノ次第余  
人ノ聞ヘモ耻シ。殊ニハ父庄司長清ガ逝去

(6ウ)

アリテイマダ中陰ノ事。カタ〜以テ浅間敷我心弓矢取  
身ノ有ルヘキコトナラズト。心デ心ヲ戒メテセメテ心ヲ  
慰メント。燕寝ノ障子ヲ引アケテ。詠ヤリツル庭ノ  
面。頃ハ弥生ノ月半ニテ園林歴乱トシテサキミタレタル  
桜花。妙ナル盛ノ景色ナリ。重友ハナカメ入テ。実ヤ父  
長清カコノ桜ヲ愛シ玉ヒ未タ苔ノ其内ヨリ酒宴ヲ設ケテ  
歌ヒツ舞ヒツ三春ノ行楽アリシハ。ヤウ〜去年ノ  
事ナリシニ。今年ノ花サカリハ嬌鳥春花モ涙ノ種。思  
ヘハ墓ナキ浮世ノ中アヂキナノ娑婆ノアリサマ。今年ノ  
花ハ去年ノ好ニ似タレドモ去年ノ人ハ今年ニ到テナシ。  
花ニダモ如ザル身ノ上ナリ。年々歳々花相似歳々年々  
人不レ同ト古人ノ言ニ相違ナシト。父ノ事ヲ思ヒ出シ。  
落涙數行ニ及ビケル。

(7オ)

早日モ夕陽ニ及ビ物哀レナル折柄ニ。近辺ノ僧来リ持仏  
 ノ一間ニテ中陰ノ勤ヲナシ鐘鈷ノ音モアワレゲニ。念  
 仏ノ声イト殊勝ニゾ聞ヘケル。重友モ肝ニ銘ジイザ仏  
 前ニ参ラント。手水鉢ニテ手ヲ清メ。硯トリ出シスル墨  
 ノ涙ニ曇ル庭ノ面。シヅ心ロナク鐘ノ音ニサカリノ一花  
 落チリテ。硯ノ中ヘ落ケルガ忽チ墨染トゾナリニケル。  
 重友コレヲ打ナガメ。怪ヒ哉風モ吹来ラザルニ。コノ花  
 ノ硯ノ中ヘ落入シトハ。我ニ無常ヲ教ルトヤ。今年花落  
 カシシヨクアラタマリ。ハナヒラヒヒテマタタレカアル。飛花落葉モ無常ノ説法。  
 顔色。改明年花開復誰在。飛花落葉モ無常ノ説法。  
 マタ半開キノ桜花。墨ニ染リテ斯ノ如キハ蒼メル花ノ  
 姿ヲハ墨染ノ姿ニナレヨト。仏ノ我ニ示シ玉フカト暫シ  
 涙ニクレケルガ。頓テ仏前ニ畏リ父ノ位牌ヲ伏拝ミ我此  
 家ノ嫡宗タリト雖ドモ

(7ウ)

故アリテ。今日只今。剃髮染衣ノ形トナリ。御追善申上  
 ヘシト緑ノ黒髪髻ヨリフツト切テ。仏壇ニ備ヘ置キ舎  
 弟八郎重清ヲ呼テ右ノ次第ヲ物語リ。汝ハ当家ヲ相続シ

テ我ニカワリテ家名ヲ起セヨ必ス頼トアリケレハ重清モ  
 落涙シ少シモ氣ツカヒアルヘカラズ心安ク巡拜アレト  
 潔ク述ヘケレド。心ノ内ハ愁歎ニ。アタラ桜ノ若キ  
 身ヲ散ラス心ノ悲サニ良ウチウルム眼ノ内。互ニ別レヲ  
 眺ノ鐘トモロトモ告置テ重友ハ発心修行。生年二十三  
 歳ニテ。諸国ヲ巡ル行脚ノ身ヲ。風雲ニウチマカセ。涙  
 ト共ニ出テ、行。心ノ内コソ哀レナリ。宿善ノ因縁トハ  
 云ナカラコレ正シク明月姫ノ行衛シレス。我恋ノカナハ  
 サルニ力ヲ落望ミヲ断。世ヲアヂキナク思ヒ切。浮世  
 ノ中ヲ捨法師

(8オ)

コキワミゾメ。ヤツレハテレイフチレイシヤ。ジユンレイ  
 濃黒染ニ簍。果霊仏靈社ヲ巡礼シ。仏道修行セラレケ  
 ル。弟八郎重清ハ兄ノ遺命ヲ守リツ、家名永ク相続シ今  
 ニ神崎ノ邑ニ其旧地存セリ。即近藤治右エ門トテ。今現  
 ニ後胤アリ

国春発心。登高野。并横笛慕。夫到嵯峨。

○去程ニ三松刑部左エ門国春ハ。娘ノ行方シレザルニ又



モ妻ニ離レシカバ。力ヲ落シ氣勢モ失。有爲転変ノ浮世  
ノ中何樂暮ヘキ。国春長者ト名高キモ。妻子ニ後レ何  
ニカセシ妻珍宝及王位臨命終時不隨者ト。仏ノ金言  
今月今日。此身ノ上ニ思ヒ知ル永キ未来ゾ大事ナレト。  
覺悟キワメテソレヨリモ。家臣初鹿平三春秀ニ跡ヲ讓  
リ。諸国修行ノ志実

(8ウ)

逆縁ノ菩提ナリ。妻ノ闕遺ヲ取アツメ白骨ヲ首ニカケ。  
弓矢ヲ今ハ引カヘテ。珠数ヲ手ニカケ浮世ヲハ思ヒ切タ  
ル目ノ中ニ。ウカム涙ハ水精ノ玉ヨリ繁キ詞サヘ涙ノ  
ミコミ称名シ。高野山ヘト急ギケル。ソモ〜高野山ハ  
帝城ヲ去ルコト遠クシテ寂寞タル無人城晴嵐梢ヲナ  
ラシテハ。夕日ノ影閑ナリ八葉ノ峰ハノ谷誠ニ心モス  
ミヌヘシ。花ノ色ハ林霧ノ底ニ綻ヒ鈴ノ音ハ尾上ノ雲ニ  
響ケリカ、殊勝ノ山ナレハ承和ノ古弘法大師ハ肉身  
証ニ三昧待慈氏下生トアリテ。彼摩訶迦葉ノ雞足洞  
ニコモリテ氏頭ノ春風ヲ期シ玉フカ如ク。此山ニ入定シ

玉ヒ五十六億七千万歳ノ曉。慈尊ノ出世ヲ待玉フ無比ノ  
靈地トキコヘタリ。登レハ程ナク御影堂三鈷ノ松モ枝茂  
ク

(9オ)

多宝塔ヲ伏ヲガミ。諸堂一々順礼スルニ。瓦ニ松生ヒ垣  
ニ苔ムシテ歳霜久シク覺タリ。実ヤ巖松高聳嵐破ニ  
妄想夢流水清流浪滌塵埃垢。カ、ル尊キ靈跡ナ  
レハ。或ハ座禪ノ床モアリ。或ハ念仏三昧ノ庵モアリ。  
思ヒ〜ニ浮世ヲ厭ヒ草舍茅堂ニ心ヲスマシテ。各〜  
修行マシ〜ケリ国春ハ巡拜シ清浄心院ノ辺ニテ滝口入  
道ニ不図逢レケル。コノ滝口入道ハ都ニテ国春ガ互ニ能  
知レル人ナリ。滝口ハ斎藤左エ門茂頼カ子ノ斎藤滝口時  
頼トテ本ハ小松内府ノ侍臣タリ。国春トモ内縁アリシ人  
ナレハ。互ニ身ノ上ヲ物語。ソレヨリ清浄心院ノ庵室ヘ  
伴ヒ入テ越方ノ事トモ語り合。ツビニ滝口入道ニ剃髮ヲ頼  
ミテ。黒染ノ姿トナリ同室ノ好ミヲ結ビケリ。国春入道  
往年

(9ウ)

四十七歳トカヤ。人ノ発心修行スル其因縁ハ各々異ナリトイヘドモ。墨染ノ形トナリヌレハ。共ニ同仏弟子ゾカシ国春ハ娘ノ行方シレス妻ノ死セシヲ因縁トシ。重友ハ我恋ノ遂ゲサルニ飛花落葉ニ感懷シテ出家トナル。滝口時頼ノ発心セシ其原根ヲ尋レハ滝口ハ小松殿ノ從臣タリシガ。十三ノ歳本所ヘ参タリ建礼門院ノ婢使ニ横笛ト云女アリ最モ美麗ノ艶女タリシカハ。滝口コレヲ最愛シ浅カラス契ケル。父茂頼コノ由ヲ伝ヘ聞テ慎リ適レ世ニアラン者ノ婿ニモナシ。出仕ナトヲモ心安クセサセント思ヒツルニ。由ナキ者ヲ思ヒ初テ不義ノ汚名ヲ蒙リナントテ。度々ヨビ寄。規諫ヲナシケル。滝口思ヒケルハセiw王母ト謂シ人モ昔ハ有テ今ハナシ。東方朔

(10オ)

トキコヘシモ名ノ存シテ目ニハミヘズ。老少不定ノ境ハ唯電光石火ニ異ナラス。縦ヒ命長シトイフトモ。七

八十ヲハ過クヘカラス。其間ニ身ノ盛壮ナルハ纔ニ二十余年ナリ夢幻ノ世ノ中ニ。醜キ者ヲ妻ニ具シ盛ン事何ソ樂シカルヘキ。又思ハシキ者ヲ見ントスレハ。父ノ命ヲ背ニ似タリヨシク是ゾヨキ善知識浮世ノ中ヲ厭ヒ捨。実ノ道ニ入ンニハ如ジト生年十九歳ニテ誓撮切テ嗟峨ノ往生院ニ行ヒスマシテ居タリケル。横笛ハ此由ヲ聞ヨリモ恨メシキ御心カナ。我ニモ角ト知ラセ玉ハズ状ヲカヘ玉フ事ノ悲シサヨ。タトヒ出家ノ御身ナリトモ尋子逢テ恨ントテ。都ヲ忍ヒ出ヰ鬢一人召具シテ。嗟峨ノ方ヘトアクガレケル比ロハ二月十日アマリ。梅津ノ里ノ春

(10ウ)

風ニ余所ノ匂ヒモナツカシク。大井川ノ月影モ霞ニコメテ朧ナリ一方ナラヌ哀レサモ誰ユヘトコソ思ヒケメ。往生院トハキ、ツレドモ。定カニ何レノ坊トモシラサレバ。爰ニタ、スミ彼所ニヤスラヒ。尋子兼ルゾ無慚ナル。住荒タル僧房ニ念誦ノ声ノシケルヲ聞テ滝口カ声ト聞知テ鬢ヲ以テ言ヒ入レケルハ御姿ノカハリ

テ在スヲハ見參ラセ度コレマテ尋參リテ待レト仰セケレ  
ハ滝口入道ハ胸ウチ噪キ浅間シク障子ノ隙ヨリ視キミ  
レハ。涙ニ絞レシ顔色ニテ尋子兼タルアリサマナリサ  
シモ思ヒ切捨シ。大道心ノ滝口モ不便ノ涙衣ニソ、キ暫  
ハ兎角ノ答ナク咽ヒ俯シテアリケルカ。良アリテ涙ヲ押  
へ。過タリ〜棄恩人無為真実報恩者。心ヨハクテハ叶  
フマシ

(11オ)

ト人ヲ出シテ申サセケルハ。ソレハ門違へニテ候フベシ  
全クコレニハ左様ノ御方ハマシマサスト謂セタレハ。横  
笛キ、テ恨メシ氣ニ御心ツヨキ事哉ト歎ト是非モナク  
〜ニ。涙ヲ押へテ歸リケル

滝口時頼遁高野并横笛執情為黃鶯

○滝口入道浄阿ハ同宿ノ僧ニ語りケルハ。斯モ寂寞ト  
シテ念仏ノ障碍ハナケレトモ。アカデ別レシ女ニ此閑  
居ヲ見セテ候ハ縦ヒ一度ハ心ツヨク逢ストモ。又モ慕  
フコトアラバ心モ動キ発心ノサワリニモナリ申スヘシ。

今ハ暇申ストテ。嵯峨ヲハ出テ、高野ニ登リ。清淨心  
院ト聞カラハ実頼母シク有難ケレト。院中ニ庵ヲシツラ  
ヒ行ヒスマシテ居タリケル。横笛斯クト

(11ウ)

聞ヨリモ世モアザキナノ憂身ノ上。今生こそ隔テアリト  
モ。来世ハ一蓮託生ト。黒髪ヲ切ステ、蒼ノ花ヲ散  
シケル。浮世ヲ放シ俄尼身ヲ黒染ト状ヲカヘ。仏道修  
行ト志サス。滝口入道コレヲキ、ヨクモ貞婦ノ道ヲワキ  
マヘ。状ヲカヘヌル嬉シサヨト。一首ノ歌ヲ贈リケル  
剃ルマデハ恨ミシカドモ梓弓真ノ道ニ入ソ嬉シキト  
アリケレハ横笛ノ返シ

剃トテモ何カ恨ミン梓弓引ト、ムヘキ心ナラ子バト

其後横笛ハ奈良ノ法華寺ニ在ケルガ。其思ヒノ積ニヤ幾  
程ナクテ病ノ床ニ臥シケルガ。既ニ命終ニ及ントスル  
時ニ。角ゾ

山フカミ。思ヒ入ヌル柴ノ戸ノ誠ノ道ニ我ヲ導ケト

(12オ)

詠シ残シ終ニ墓ナク成ニケリ。生齡纔ニ二十一歳トカヤ  
 案スルニ一説ニ云ク横笛嵯峨ニ尋行キ相見ヲ請ト  
 イヘドモ許サス於レ是。桂水ニ身ヲ投シテ死ス山フ  
 カミノ歌ハ其時ノ辭世ナリ。滝口コレヲ憐ミ終ニ戸  
 ヲ茶毘シテ其骨ヲ首ニカケ。高野山ニ登リ奥ノ院ニ  
 テコレヲ納ト又一説ニ曰。横笛ハ尼トナリ後世ノ務  
 ヲイトナミテ。滝口カ衣袈裟等ヲ洗滌セントゾ。今  
 ノ三宝院ハスナハチ其跡ナリ世人滝口ノ寺ト云フ  
 ト。以上ノ兩説イマダ是非ヲシラズ年代久遠ニシテ  
 文献徴スルニ足ラズ。故ニ今ハ平家物語ニ從フ読  
 者コレヲ察セヨ

滝口入道コノ由ヲ聞テ。イヨく深ク行ヒスマシテ。居  
 タリケレハ

(12ウ)

父モ不孝ヲ宥シケリ。親戚皆信從シテ高野ノ聖ト申ケル  
 三松国春入道モ共ニ同庵ニ住シテ。念仏修行シケル程ニ  
 彼横笛カ恋慕ノ執情滝口ヲシタヒテ。黄鶯トナリテ。

滝口ガ庵ニ来リ庭前ノ梅ノ枝ニ止リ。囀ル音他ノ鶯ノ声  
 ニ異ナリサモ悲傷ノ音ヲ出シ哀レニサヘツル声。身節  
 ニコタヘテ聞ヘケル斯テ或春雨ノ朝。滝口入道ハ風ノ心  
 地ニテイマタ起モヤラテ巖中ニ臥居タルニ。アヤシキ  
 夢ヲソ見タリケル。微雨蕭々トフリ来リ春艸モウルホヒ  
 テ。庭ノ樹木モ露ヲ含凄然タル折柄ニ梅ノ木ノ下ニ。  
 横笛カ姿。顔容オト口ヘ涙タクミサモ愛慕氣ニ滝口ニ向  
 ヒ。偕モ世ノ狀況ハ變。リ果ヌル事ドモ哉。アカ  
 ヌ別レトナリハテ。儘ナラヌ世ヲ恨ミ玉ヒ。

(13オ)

真ノ道ニ入玉ヒテヨリ。我ハ女ノ身ナレハ斯マテハ思ヒ  
 切モナク。嵯峨ノ往生院ニ在ストキ、尋至リ申セト  
 モ更ニ対面モナシ玉ハス。力ナク立カヘリ爰ヤカシコト  
 尋子シカトモ。終ニ逢見コトモナク。悲サノマ、浮世ヲ  
 ステ。南都ノ法華寺ニ尼ノ姿トナリ。仏ノ道ニ趣ケド  
 モ。君ヲ思フ念止スシテ。身マカリテノ後。尚執念ニヒ  
 カサレ鶯ノ形ヲ受。君ヲシタヒテ爰ニ来レリ我存命聞

ニモ逢マヒラセント思ヘトモ。女ノ身ノ悲シサハコノ山  
ヘ登ルコト叶ハズ。今死シテカク鶯トナリヌレハコソ来  
リテ逢見嬉サヨト。シホくトシテ物語テ一首

ヤヨヤ君。死スレハ登ル高野山恋モ菩提ノ種トコ  
ソナレト

詠ジ今ハ思ヒ置コトナシ。唯コノ上ノ御情ニハ鳥類ノ  
身ヲ

(13ウ)

転シテ仏身ニ至ルヤウ。追善ヲナシテタヘ。一蓮託生ノ  
再会ヲ得サセ玉ヘ。サラハくト云カト思ヘハ。滝口  
入道ノ夢ハサメケル。偕ハ不思議ト傍ヲミレハ庭ノ梅ニ  
鶯ノ囀リテコソ居タリケル。入道両眼ニ涙ヲウカヘ手水  
ウガヒシ法衣ヲ着シ。庭ノ鶯ニ向ヒテ。唯今ノ夢ノ告身  
節ニコタヘテ哀レナリ。汝実ノ横笛カ執念ナラハ。爰ヘ  
来リテ我手ニトマレヨト言モ果ヌニカノ鶯翻々トシテ滝  
口カ手ニ止リテ愛襲ゲニ羽タ、キスレハ入道モ偕コソコ  
レガ横笛カ。不便ヤ可愛ヤカクマデニ。鳥ト成テ我ヲ慕

ヒ。尋来リシ志。ウレシトモ不便トモ。イツノ世ニカハ  
忘ルヘキト。手ニスヘ乍ラハラくト。羽ニ滌血ノ  
涙。鳥モ染ナン風情也

兵庫築島伝卷二終

(14オ)

### 【卷一解題】

築島についての記述を離れ、国春・明月姫に関する記述を主とするのが卷二である。卷二だけを見ると、やかもすると築島と無関係に思われるが、両名とも幸若舞『築島』等の築島を素材とする先行書に多く登場し、また『撰州兵庫築嶋寺略縁起』にも「謠伝ふ国春入道名月姫の事是なり」という記述を見出すことの出来る人物である。この『築島伝』卷二の記述は、今一例を以て示すが、幸若舞『築島』との類似が窺える。左表は上段が『築島伝』、下段が幸若舞『築島』（新日本古典文学体系『舞の本』所収）の本文（ともにルビは省いている）である。

『兵庫築島伝』巻一

「野瀬」藏人奪<sup>ニ</sup>明月<sup>ヲ</sup>并国春<sup>ノ</sup>令室損<sup>ス</sup>簪粧<sup>ニ</sup>」

既二日モ西山二傾ントセシカハ。イザ帰館スヘシトテ。皆く打ツレ立帰ル其帰路三松刑部左エ門ノ娘。明月姫モ。同ク家ニ帰ラントテ摘トリツル。若草ヲ小車ニ携ヘサセ勃率トシテアユミユク。藏人家兼コレヲミテ。何トナク姫ノ姿ニ迷ヒ從臣ヲ処タニ忍ハセ。一群薄ノ陰ニカクレ。明月姫ヲ窺ヒ見ル姫ハ我家ニカヘラントテ。金剛草ノ一英萌出タルヲ取テ斯ゾ

春ハマツ。駒ツナキニゾ。若葉サス。古葉ノ色モミヘワカバ  
コソト

詠シテ打笑タリケル折柄薄ノ陰ヨリ

春ノ日ニ。主モミヘサル離レ駒。雲ノ井ニテモ繫トメバヤト  
ヨミテ藏人家兼。ツト顯レ出タリケル。

多少の差異は認められるものの、大筋に於いて幸若舞『築島』に類似しているといえるかと思つ。

しかしその一方で、幸若舞『築島』が国春捕縛から来歴を描くのに対し、『築島伝』はこの構成を用いていない。また重友についても、幸若舞『築島』では国春捕縛を明月姫に知らせる（『築島伝』では巻三に記されている）

幸若舞『築島』

家包、何となく姫の姿を見付、移ろひやすき紫の色染めぬこそよしなけれ。声立つばかりに思へども、「思ひの色に立出ては、悪しかりなん」と思ひ、供の者をば、はるく」と忍ばせ、我身是一群薄の候ひけるに休らひ立て、姫の姿を、心静かに見奉れば、夕日西に傾き給へば、姫は家路に帰らんとて、駒繫の一房萌え出たるを取り持ちて、

春は先づ駒繫にぞ若葉さす古葉の色も見えわかばこそ  
草叢に忍ぶ家包が、忍ぶ心の包みかねて

春の野に主も見えざる離れ駒蜘蛛の網にても繫ぎ止めばや  
かやうに詠じて現れ出る。

る）場面まで登場しないと云った差異が認められる。国春捕縛を国春の諸国修行の後に記すという点においては、石見掾正本『ひやうごのつき嶋』等にも窺え、重友が明月姫が連れ去られるより先に登場するという点のみを注視し、取り上げるならば、やはり石見掾正本等の先行書に同様の構成を見出すことが出来る。さらに管見の

限りではあるが、幸若舞『築島』を含む先行する築島成就を主な素材とする書に、『平家物語』において記され、広く知られる横笛に関する記述が認められないといった『築島伝』の特色が窺える。

また先号に於いて『平家物語』との関係が窺えることを簡略に述べたが、「滝口時頼通<sup>ル</sup>高野<sup>ニ</sup>并横笛執情為<sup>ル</sup>黄鶯<sup>ト</sup>」における円信の考証箇所にも『平家物語』の名が記されており（巻五においても記されている）、文献に拠る姿勢とともに『平家物語』の記述を重んじていたことが窺えることを最後に指摘しておきたいと思う。

#### 〔付記〕

先号巻一の翻刻において、「慎<sup>イカ</sup>マ<sup>リ</sup>」としたが、校了後『倭玉篇』（米沢文庫本）に「慎<sup>シ</sup>イ<sup>カ</sup>ル」とあることを知った。また（12ウ）において、近村<sup>キリツ</sup>としたが、近村<sup>キンジン</sup>の誤りである。ここに記し、訂正させていただく次第である。

（もりた まさや・関西学院大学文学部教授）

（たかせ まひと・関西学院大学大学院  
文学研究科博士課程後期課程）